



T細胞性急性リンパ性白血病の治療がよりよく！ ～生存率が向上！治療の負担も軽減～



日本小児がん研究グループ（JCCG）が成人白血病治療共同研究機構（JALSG）と共同で行った「T細胞性急性リンパ性白血病」の臨床試験で、めざましい治療改善がみられました。これまで治りにくかった患者さんの多くが治癒することが期待されます。世界も注目する治療として、このほど国際科学誌『THE LANCET Haematology』（ザ・ランセット・ヘマトロジー）オンライン版で試験結果が発表されました。



臨床試験名は「ALL-T11」です。ALLは急性リンパ性白血病（acute lymphoblastic leukemia）の略称、TはT細胞性、11は計画スタートの2011年を表しています。ALL-T11のポイントを説明します。



ポイント1 生存率の向上

日本でのこれまでの治療と比べ、生存率が約70%から約90%に向上しました。



リンパ性白血病（ALL）は、小児がんの中で最も多い疾患です。小児および若年成人の ALL は、日本で年間およそ 500 人が発症し、そのうち 10～15%が T 細胞性急性リンパ性白血病(T-ALL)です。T-ALL は、白血病の中でも治りにくいタイプでした。この臨床試験では、日本の従来の生存率約 70%が約 90%に改善されることがわかりました。



ポイント2 治療の負担と副作用の心配を軽減

副作用の強い「頭部への放射線治療」や「同種造血幹細胞移植治療」（※）を受ける患者さんの割合を減らしました。

※同種造血幹細胞移植



成長期の子どもの脳への放射線治療は、脳の発達に影響が出たり、成長のためのホルモンが減ってしまったり、何年後かに別のがんを発症したりするケースもあり、しないで済むのなら避けたい治療です。また、同種造血細胞移植治療は、移植前に行われる全身放射線照射や移植による臓器への障害が問題となっています。これらを受けなくても治せる患者さんが増えたため、治療による体への負担を軽減し、長期の合併症も減らすことができました。



ポイント3 共同臨床研究

日本の小児専門の研究グループと成人専門の研究グループの、初の共同臨床研究です。



白血病は小児にも成人にも発症する病気ですが、これまでは小児専門の日本小児がん研究グループ（JCCG）と成人専門の成人白血病治療共同研究機構（JALSG）がそれぞれ別々に研究を行っていました。小児と成人の境界である 15 歳～20 歳の患者さんについても別々に研究をしていました。この臨床試験は両グループが共同で取り組み、全国 125 施設が参加して経過を観察し、結果をまとめました。



ポイント4 今後の多くのT-ALLの患者さんに寄与

今回の治療は世界の患者さんに導入されることが期待されます。さらに年齢層を広げた研究も始まっています。



ALL-T11では、新しい薬「ネララビン」を取り入れ、従来から使われてきた「L-アスパラギナーゼ」の使用期間を長くし、「デカドロン」というステロイドホルモン剤を副作用に注意しながら使用すること等で、25歳未満で発症したT-ALLの患者さんの生存率が上がりました。この治療方法は世界でも広く導入されることが期待されます。また、この治療をよりよくし、さらに多くの年代の患者さんを救うことを目的としたALL-T19臨床試験が実施されています。

